



大西洋横断トンネル、万歳！／A Transatlantic Tunnel, Hurrah! (1972)／ハリイ・ハリスン（水嶋正路訳）／サンリオ（文庫・11/20刊・¥380）

ハーディーやフォークナーを挙げるまでもなく、架空の町や地方を舞台に物語を創る手法は、めずらしいものではない。ただし、全世界的な、架空の「時間」を設定するとなると、いささか難しくなってくる。

本編は、そんな別の「時間」の流れる世界が舞台である。

もし、スペインが回教徒から解放されなかったら、もし、アメリカが独立戦争に敗れていたら……。そんな世界の、別の現代で、大西洋を横断する海底トンネルが建造されようとする。——しかし、ハリスンの意図は、その別世界の視覚的なリアリティにはないようだ。むしろ、物語全体を統べるのは、ヴィクトリア時代の雰囲気（現代と中世の間にある、十九世紀の華やかさ）にある。

ハリスン自身はアメリカ人だが、今はイギリスに住んでいる。ウェルズがアンチ・ヴィクトリアだったのに、最近のイギリス系SFは（ムアコックの『グロリアーナ』（未訳）や、ブリーストの著作を含めて）、なぜか、ヴィクトリア志向である。そのせいか、本書も、冷徹な現実としてより、一つの理想社会として、世界が描かれているのだ。